

令和元年度病虫害発生予察予報第4号（7月）

令和元年7月4日
高知県病虫害防除所

《予報の概要》

作物名	病虫害名	予想発生面積※
水稲(早期稲)	いもち病(穂いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ 斑点米カメムシ類	平年並(西)、やや少(東、中央、中西) <u>多(中央、中西)</u> 、やや少(西)、少(東) <u>多(中央)</u> 、やや少(中西、西)、少(東) やや少(中央)、少(東、中西、西) <u>やや多～多(県下全域)</u>
水稲(普通期稲)	いもち病(葉いもち) ツマグロヨコバイ ヒメトビウンカ セジロウンカ	<u>やや多(中西)</u> 、やや少(東、中央、西) <u>多(中央)</u> 、平年並(中西)、少(東、西) 平年並(中西)、少(東、中央、西) 少(県下全域)
かんきつ類(温州みかん)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	平年並(中央) 平年並(中央) 少(中央) <u>多(中央)</u>
かんきつ類(中晩柑類)	そうか病 黒点病 かいよう病 ミカンハダニ	<u>多(東、西)</u> 、少(中央、中西) <u>多(中央、中西)</u> 、やや少(東、西) <u>多(東、中央)</u> 、少(中西、西) <u>多(東、中央)</u> 、やや多(中西)、少(西)

※ （ ）内の表記 東：県東部、中央：県中央部、中西：県中西部、西：県西部

I 気象予報（高松地方気象台 6 月 27 日発表）

＜予想される向こう 1 か月の天候＞ 6 月 29 日から 7 月 28 日

平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう 1 ヶ月の降水量は、平年並または多い確率ともに 40％です。日照時間は、平年並または少ない確率ともに 40％です。

週別の気温は、1 週目は平年並の確率 50％です。2 週目は平年並の確率 50％です。

＜向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）＞

期間	対象地域	要素	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
1 ヶ月	四国地方	気温	30	40	30
		降水量	20	40	40
		日照時間	40	40	20

＜気温経過の各階級の確率（％）＞

期間	対象地域	低い	平年並	高い
1 週目	四国地方	20	50	30
2 週目		30	50	20
3～4 週目		30	40	30

＜予報の対象期間＞

1 ヶ月：6 月 29 日（土）～ 7 月 28 日（日）

1 週目：6 月 29 日（土）～ 7 月 5 日（金）

2 週目：7 月 6 日（土）～ 7 月 12 日（金）

3～4 週目：7 月 13 日（土）～ 7 月 26 日（金）

II 病虫害発生予想

1 早期稲の病虫害

1) いもち病（穂いもち）

発生量：平年並（西部）、やや少（東部、中央部、中西部）

根 拠

(1) 6 月の調査では、県中西部と西部で発生が見られたが、発生程度は低く、進行型病斑も見られなかった。

(2) 7 月は、曇雨天の日が多いと予想されていることから、いもち病の増加要因としてはプラスの確率が高い

(3) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、県中央部以東は 6 月 16 日を最後に感染好適日が確認されていないが、県西部では 6 月 24 から 27 日にかけて感染好適日が確認されている。早期稲の出穂は 6 月 4 半旬から始まっており、県西部を中心に葉いもちから穂いもちへの移行が予想される（BLASTAM による葉いもち発生予測判定状況は病虫害防除所 HP を参照）。

対 策

(1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。

(2)QoI剤耐性菌発生を防止するため、使用回数は作期を通じて1回とする。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（中央部、中西部）、やや少（西部）、少（東部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県下全域で発生がみられ、発生面積は県中央部、中西部で平年よりも多く、西部で平年よりやや少なく、東部では平年よりも少なかった。また、発生程度は西部で平年よりもやや高かったが、その他の地域は平年並であった。
- (2) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられていないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：多（中央部）、やや少（中西部、西部）、少（東部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県東部を除いて発生がみられた。発生面積は県中央部で平年よりも多く、中西部、西部で平年よりもやや少なかった。
- (2) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられる。

対 策

- (1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：やや少（中央部）、少（東部、中西部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では県中央部、中西部で発生がみられた。発生面積は、県中央部で平年よりもやや少なく、中西部では平年よりも少なかった。発生程度は各地域とも平年よりも低かった。
- (2) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられる。

対 策

- (1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合など、高密度になった場合には薬剤防除を行う。

5) 斑点米カメムシ類

発生量：やや多～多（県下全域）

根 拠

- (1) 6月中旬のアザミウマ類のすくい取り調査時（出穂前）に、多くの地点でクモヘリ

カメムシ、ホソハリカメムシなどが捕獲されている。

対 策

- (1) 出穂期以降にカメムシ類の発生がわずかでも見られる場合、斑点米の発生が予想されるので、穂揃期及びその7～10日後に防除する。
- (2) ミナミアオカメムシの発生が見られる場合は、合成ピレスロイド剤の効果が劣るので、他系統の剤（ネオニコチノイド剤等）を用いる。

2 普通期稲の病害虫

1) いもち病（葉いもち）

発生量：やや多（中西部）、やや少（東部、中央部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中西部と西部で発生が見られた。発生面積は中西部で平年並、西部では平年よりも少なく、発生程度は中西部で平年よりもやや低く、西部で低かった。
- (2) 7月は、曇雨天の日が多いと予想されていることから、いもち病の増加要因としてはプラスの確率が高い
- (3) BLASTAM（葉いもち発生予測システム）では、普通期稲地帯で6月22日以降継続的に感染好適日が確認されている（BLASTAMによる葉いもち発生予測判定状況は病害虫防除所HPを参照）。

対 策

- (1) 気象や発生状況に注意し、進行型病斑を認めたら速やかに薬剤防除を行う。
- (2) QoI剤耐性菌発生を防止するため、QoI剤の使用回数は作期を通じて1回とする。
- (3) 窒素過多は発病を助長するので、穂肥等の施用は生育状況を見ながら適切に行う。

2) ツマグロヨコバイ

発生量：多（中央部）、平年並（中西部）、少（東部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中央部、中西部、西部で発生が見られた。発生面積は中央部で平年よりも多く、中西部で平年並、西部では平年よりも少なかった。発生程度は各地域ともに平年以下の発生であった。
- (2) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられる。

対 策

- (1) 近年、本虫が媒介する萎縮病の発生はほとんどみられていないが、出穂期から登熟期にかけて高密度になると実入りが悪くなることがあるので、その場合は防除を行う。

3) ヒメトビウンカ

発生量：平年並（中西部）、少（東部、中央部、西部）

根 拠

- (1) 6月の調査では、県中西部のみで発生が確認され、発生面積、発生程度とも平年並の発生であった。

(2) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられるが、未発生地域でも気温の上昇とともに発生がみられるものと思われる。

対 策

(1) 本県では、本虫の媒介する縞葉枯病がほとんど発生していないことや高密度になることもほとんど無いため、本虫のみを対象とした薬剤防除の必要性は低い。

4) セジロウンカ

発生量：少（県下全域）

根 拠

(1) 6月の調査では、県中西部で発生が見られたが、他の地域では発生は確認されなかった。

(2) 6月末現在、予察灯への飛来は認められておらず、県内への飛来量は少ないと考えられる。

(3) 7月の気温は平年並で、曇雨天の日が多いと予想されていることから、密度の増加要因は少なく、現在の発生が続くものと考えられる。

対 策

(1) セジロウンカはトビイロウンカ、コブノメイガ同様、中国大陸等から飛来する害虫であるため、ほ場内での発生に注意する。多飛来があった場合には、産卵痕や吸汁により生育被害が出る可能性があるので、薬剤防除を行う。

3 カンキツ（温州みかん）の病害虫

1) そうか病

発生量：平年並（中央部）

根 拠

(1) 6月の調査では、発生面積は平年よりもやや少なく、発病程度は平年並であった。

(2) 7月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、発生は増加すると考えられる。

対 策

(1) 幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：平年並（中央部）

根 拠

(1) 6月の調査では、果実での発生は確認されなかった。

(2) 7月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。

(2)前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：少（中央部）

根 拠

(1) 6月の調査では、発生は確認されなかった。

(2) 7月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、発生増加にはプラス要因ではあるが、罹病葉などが認められてないことから、6月と同様の状況が続くと考えられる。

対 策

(1)銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：多（中央部）

根 拠

(1) 6月の調査では、発生面積は平年よりも多かったが、発生程度はやや低かった。

(2) 7月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、現在の状況が続くものと考えられる。

対 策

(1)薬剤抵抗性の回避を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

4 カンキツ（中晩柑類）の病害虫

1) そうか病

発生量：多（東部、西部）、少（中央部、中西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県東部のポンカンや西部のユズなどで発生が見られ、両地域ともに発生面積は平年に比べ多かった。

(2) 7月は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、感受性の品種を中心に発生は増加すると考えられる。

対 策

(1)幼木や発生の多い園地では黒点病との防除を兼ねて、予防的な薬剤散布により感染を防ぐ。また、防風垣などの整枝を行い、園地の通風をよくする。

2) 黒点病

発生量：多（中央部、中西部）、やや少（東部、西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県東部、中央部、中西部で発生が見られた。中央部、中西部では、発生面積は平年よりも多く、発生程度は平年並、その他の地域での発生は少なかった。

(2) 7月 は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 密植園での間伐、老木の更新、防風林の整備等により、枯枝の発生ができるだけ少なくなるように管理する。

(2) 前回の防除から25日以上経過するか、累積雨量が250mmを超えると薬剤散布を行う。

3) かいよう病

発生量：多（東部、中央部）、少（中西部、西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県東部のポンカン、中央部、西部の文旦で発生が見られた。発生面積は東部と中央部で平年より多く、西部では少なかった。発生程度は各地域ともに平年以下であった。

(2) 7月 は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、既発ほ場を中心に発生が増加すると考えられる。

対 策

(1) 銅剤等の散布による予防に努めるとともに、発病がみられる夏秋梢は剪定、除去する。

4) ミカンハダニ

発生量：多（東部、中央部）、やや多（中西部）、少（西部）

根 拠

(1) 6月の調査では、県下全域で発生が見られた。発生面積は県東部、中央部で平年よりも多く、中西部でやや多かったが、西部では少なかった。発生程度は、東部で平年よりもやや高かったが、他の地域は平年以下であった。

(2) 7月 は曇雨天の日が多く、降水量は平年並もしくは多いと予想されていることから、現在の状況が続くものと考えられる。

対 策

(1) 薬剤抵抗性の回避を避けるため、異なった系統の薬剤によるローテーション防除を心がける。

農作物の病虫害防除のための情報です。お気軽にご利用ください。

病虫害防除所ホームページ（こうち農業ネット）

- ① 病虫害発生予察月報、病虫害発生予察予報
- ② 病虫害発生予察注意報、病虫害発生予察警報、病虫害発生予察特殊報
- ③ 病虫害発生予察技術資料
- ④ 新しく問題となっている病虫害 etc.